

## 論文

# 障害児保育実践コンピテンシー尺度における 信頼性と妥当性の検討

永瀬 開

NAGASE Kai

藤田 久美

FUJITA Kumi

要旨：本稿では、筆者らが開発した障害児保育実践コンピテンシー尺度(CSPCD)の信頼性と妥当性を検証した。さらにその上で、障害児保育実践コンピテンシーと保育士としての在職年数、障害児支援経験の有無との関連について検討した。その結果、CSPCDは、【障害児保育への関心】、【障害児保育に必要なアセスメント】、【障害児保育における実際の関わり】、【障害児保育における保護者・他機関との連携】、【障害児保育における専門性の開発】の5つの下位尺度から構成され、十分な信頼性と妥当性を有していることが明らかになった。また、CSPCDにおける【障害児保育への関心】得点と保育機関での在職年数が有意に関連することと、CSPCDの合計得点、及び各下位尺度の得点が障害児支援経験の有無によって有意に異なることも明らかにされた。

キーワード：障害児保育 保育士 コンピテンシー 在職年数 障害児支援の経験

## I. 問題と目的

現在、地域や家庭を取り巻く環境の大きな変化の中で、家庭での養育に対する支援が求められている。このような潮流の中、保育所をはじめとする保育機関は子どもと保護者を支える地域の重要な社会資源として位置付けられている(山本, 2020)。加えて、地域共生社会の構築を目指す我が国にとって、これらの保育機関において、インクルーシブな環境を構築するための障害児保育実践が行われることは必要不可欠であることも指摘されている(藤田・永瀬, 印刷中)。そのため、保育者には障害や特別な支援ニーズのある幼児を適切に支援するための高い資質や専門性が求められている(園山・由岐中, 2000)。このような保育者における障害児保育に関わる資質や専門性をアセスメントすることは、保育者が障害児保育における自身の強みや苦手さを知る上で重要であると

もに、保育者に対する専門性を高めるための支援を考える上でも極めて重要である。

従来、保育者における高い資質や専門性はコンピテンシーという概念から捕らえられてきた(山本, 2020)。コンピテンシーとは、職務や役割における効果的ないしは優れた行動に結果的に結びつく個人特性だと定義されている(Everts, 1987)。コンピテンシーは、保育領域をはじめとして、教育、看護、福祉といった対人援助の領域において教育効果の測定や職業能力の指標として用いられている。保育の領域においても、近年、保育士に必要なコンピテンシーの検討(山本, 2020)や、コンピテンシーを測定することができる尺度の開発が進んでいる(中村・水上, 2016)。

例えば、山本(2020)は、保育士を対象に行った調査において、子どもや保護者への支援に必要なと思われる力を自由記述で尋ね、そこで得られた

自由記述を計量的に分析した。その結果、保育士に求められる子どもや保護者への支援に必要な力として、相手の立場を考えるといった【対人関係における基本的な視点】、素直さや向上心を持っているといった【成長への志向】、社会の一員としての人間性や社会性を備えているといった【社会人としての基本的態度】、挨拶をすることや相談をすること、思いやりを持つことといった組織の中での保育実践に求められる【組織内での協働】、家族に対する支援を行うための技術や態度を表す【家族支援】、臨機応変に子どもに対応するといった【保育士の資質と経験に基づく実践】、子どもや保護者の気持ちに寄り添うといった【支援に対する基本的実践】、傾聴や共感、受容といった【コミュニケーション技術】といった力が見出された。これらの力は保育士に求められるコンピテンシーであるということが出来る。また、中村・水上(2016)は、保育士におけるコンピテンシー評価尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。保育士におけるコンピテンシー評価尺度は、保育技術が高いなどの項目で捉えられる職業専門性におけるコンピテンシーを表す【専門行動】、挨拶ができるなどの項目で捉えられる職員同士のコミュニケーションや対人関係に関するコンピテンシーを表す【対人関係行動】、取り組み熱心などの項目で捉えられる施設全体で目標に向けて取り組むコンピテンシー【仕事活力行動】、素直であるなどの項目で捉えられる忍耐を保ち勤勉に職務を遂行するコンピテンシー【自己統制】の4つの因子によって構成されていた。そして、この保育士におけるコンピテンシー評価尺度は高い信頼性と妥当性を有しているとともに、保育実践のパフォーマンスと高い相関関係にあることが明らかにされている(中村・水上, 2016)。これらの研究から、保育士に求められるコンピテンシーについては、専門的な保育に関する知識や技術のみならず、社会人として求められる態度や望ましいパーソナリティも含まれていることがわかる。

このように、保育士に求められるコンピテンシーが明らかにされる中、障害児支援に関するコ

ンピテンシーについても、それを測定することができる尺度が開発されている。藤田(2019)は、幼児期の障害児通所支援に携わる支援者のコンピテンシー尺度を開発し、その信頼性について検証している。幼児期の障害児通所支援に携わる支援者のコンピテンシー尺度は、障害児の発達支援、家族支援、地域支援に関心や意欲を持ち、支援に臨む態度が備わっていることを表す【関心・意欲・態度】、社会人としての基礎的な能力及びコミュニケーション力、ストレス対処能力が備わっていることを表す【社会人基礎力】、児童発達支援を利用する幼児期の障害児の発達支援、家族支援、地域支援の知識を持っていることを表す【知識】、児童発達支援を利用する障害のある子ども一人ひとりの障害の特性や発達の状態を理解した上で、発達支援、家族支援、地域支援を行っていくための知識を持っていることを表す【知識】、児童発達支援を利用する障害のある子ども本人の最善の利益を保証する支援を行う技術を兼ね備えている、あるいは、障害児の発達支援、家族支援、地域支援を行うためのアセスメントの技術、児童発達支援計画、評価を行う技術を兼ね備えている、そして、家族、障害児の利用する他機関、関係機関と連携できる力を持っていることを表す【技術】、日々の実践を通して、障害のある子ども一人ひとりの理解、家族の理解を深める努力をし、より良い支援を作り出していく実践ができる、あるいは記録を書くことやスタッフミーティング及び研修等で自己の実践を振り返り、その振り返った内容を実践に生かす努力ができることを表す【実践と省察】という5領域から構成される。このコンピテンシー尺度について児童発達支援センター等に勤務する職員611名に回答を求めた結果、いずれの領域においても高い信頼性を有していることが明らかになった。また、藤田(2019)は障害児通所支援に携わる支援者のコンピテンシーが、施設における在職年数が長くなるに従って高まることも明らかにしている。このことは、障害児通所支援に携わる支援者のコンピテンシーが個人のパーソナリティのようにある程度不変なものではなく、日々の支援経験や障害児支援に関する

研修への参加等によって高まることを示唆している。

このように保育士に必要なコンピテンシーや障害児支援に携わる専門職に必要なコンピテンシーについては、その構成要素の検討やコンピテンシーを捉える尺度の開発及び、コンピテンシーを高める要因の検討が進んでいる。しかしながら、これまで障害児保育実践に特化した資質や専門性を捉えるコンピテンシーについては、どのような構成要素を有しているのかが部分的にしか検討されていない。西木・小川(2015)は、保育士によるグループワークでの話し合いの分析から、障害特性に関する知識があり、子どもの気持ちに寄り添うことができるなどの【知識】、子どもや保護者に対する支援を実践することができるなどの【支援】、常に穏やかでいることや笑顔を絶やさないことなどの【保育者の人間性】、子どものことを知ろうとする態度や前向きな態度を示すなどの【理解】、保護者や他機関との連携をすることができるなどの【連携】といったカテゴリーが障害児保育に関わる専門性として見出されたことを明らかにした。しかしながら、西木・小川(2015)の研究では、これらのカテゴリーを構成する各発言に重複が見られるという妥当性に関する課題に加え、コンピテンシーを構成する要素について定量的に検討されていないという方法論的課題もある。このことは障害児保育実践に求められるコンピテンシーを客観的に把握するという点において課題が残されていることを示している。

こうした問題意識のもと、藤田・永瀬(印刷中)は、障害児保育に特化した資質や専門性を捉えるコンピテンシーを捉える尺度として、障害児保育実践コンピテンシー尺度(Competency Scale in Practice of Childhood care for children with Disabilities; CSPCD)を作成している。CSPCDは、上述した保育士におけるコンピテンシー尺度及び、障害児支援者におけるコンピテンシー尺度や、筆者らが保育現場で行った参与観察や聞き取りを参考にした上で作成された。CSPCDは、5つの下位領域を有しており、それぞれ、障害のある子ども

の保育に関心を持ち、障害児保育を支える理念に関心があることを示す【障害児保育への関心】、障害のある子どもの理解をもとにした援助を行うことができることを示す【子ども理解と援助】、個別の指導計画の作成を通して障害のある子どもの遊びや生活の環境設定や合理的配慮を行い、障害児の成長を支える保育実践を行うことができることを示す【障害児の成長を支えるための保育実践】、障害のある子どもの保護者や障害のある子どもが利用する専門機関と連携・協働することができることを示す【家族や地域との連携・協働】、保育の実践をもとにしたふりかえりや障害のある子どもと家族の理解と援助のための知識・技術の習得に努めることができることを示す【専門性の開発】である。これらの5領域は5つの項目からなり、それぞれ5件法で尋ねる尺度である。しかしながら、このように作成されたCSPCDの信頼性と妥当性については十分に検討されておらず、CSPCDによって障害児保育に求められるコンピテンシーがどこまで捉えられているのかどうかは不明である。

さらに、藤田(2019)が作成した障害児通所支援に携わる支援者のコンピテンシー尺度では、支援者のコンピテンシーと支援に携わってきた在職年数と有意な相関が見出されたことを踏まえると、障害児保育実践コンピテンシーについても保育機関における職務年数や障害児への支援経験の有無との間に関連が見出されると考えられる。しかしながら、障害児保育実践コンピテンシーと保育機関における職務年数や障害児への支援経験の有無との間の関連についても十分に検討されていない。以上を踏まえ、本研究では、藤田・永瀬(印刷中)が作成したCSPCDの信頼性と妥当性を検討することを目的とした。それに加えて、障害児保育実践コンピテンシーが保育士としての職務年数及び、障害児支援経験の有無と関連するかについても検討を行うこととした。

## II. 方法

### 1. 対象者及び調査手続き

第二著者が講師を務めた障害児保育に関する研修に参加したX県内の保育施設(幼稚園、保育園、認定こども園等)に勤務する幼稚園教諭及び保育士163名を対象とした。対象者の平均年齢は34.28歳(年齢幅:20-62歳;SD=10.35)であった。対象者における性別の内訳は男性が8名(40.75歳(SD=8.26))、女性が155名(34.11歳(SD=10.36))であった。また、対象者の保育年数の平均値は10.43年(年齢幅:1-40年;SD=7.86)であり、障害児支援の経験がある者が86名、ない者は77名であった。後述する質問紙が印刷された調査票を研修の開始前に配布し、倫理的配慮事項について口頭で説明した後、調査用紙への回答を求めた。

### 2. 質問紙

障害児保育実践コンピテンシー尺度(Competency Scale in Practice of Childhood Care for children with Disabilities; CSPCD)を構成する項目については、著者らの保育施設へのコンサルテーションの経験と上述した資料を参考にしながら【障害児保育への関心】【子ども理解と援助】【障害児の成長を支えるための保育実践】【家族や地域との連携・協働】【専門性の開発】の5領域にそれぞれ5項目ずつ、計25項目作成した。これを障害児保育実践コンピテンシー尺度試案(以下、試案)とした。質問紙はそれぞれ5件法(5:とてもあてはまる-1:まったくあてはまらない)で尋ねた。逆転項目は設けておらず、質問項目への得点が高いほど、障害児保育実践を行うためのコンピテンシーを高く有していることを表している。試案の項目についてTable 1に示す。

### 3. 倫理的配慮

調査用紙配布時に、結果は数値化して統計的に処理し、個人名等のプライバシーの保護には十分配慮すること。調査データは、調査研究以外には使用しないことを口頭で説明し、調査用紙の提出

を持って調査の協力を同意が得られたものとした。

### 4. 統計解析

まず、試案において想定した5領域が妥当であるのかを確認するために、試案で想定した5因子モデルについて確証的因子分析を実施し、適合度を確認した。確証的因子分析によって試案の5領域における妥当性が確かめられない場合、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を実施し、因子構造を確かめた。その後、探索的因子分析によって確かめられた因子構造について確証的因子分析を行い、その適合度を確認することとした。また、信頼性を確かめるために、尺度の合計得点及び、各下位尺度得点について、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。

上記の手続きを経て作成されたCSPCDについて、CSPCDの合計得点及び、各下位尺度と保育士としての職務年数との関連を明らかにするために、CSPCDの合計得点及び、各下位尺度と保育士としての職務年数との間におけるPearsonの積率相関係数を算出した。また、障害児支援の経験の有無と障害児保育実践コンピテンシーとの関連を明らかにするために、障害児支援の経験の有無を独立変数、CSPCDの合計得点及び、各下位尺度の得点を従属変数とした対応のないt検定を実施した。なお、すべての統計解析には、SPSS23.0及び、Amos28.0を使用した。

## III. 結果

### 障害児保育実践コンピテンシー尺度試案におけるモデルの適合度の検討

CSPCD試案において想定している下位尺度のモデルが妥当なものであるのかどうかを確認するために、確証的因子分析を実施した。事前に想定した5因子モデルの検討を行った結果、モデルの適合度の値は、 $\chi^2 = 790.600$ ,  $df = 265$ ,  $p < .001$ ,  $CFI = 0.771$ ,  $GFI = 0.702$ ,  $AGFI = 0.635$ ,  $RMSEA = 0.111$ であった。CFI、GFI、AGFI、RMSEAといった各指標の値から、事前に想定した試案のモデルの適合度が十分とはいえなかった。

Table 1 CSPCDの試案項目と平均値

項目	平均値	SD
<b>領域 1：障害児保育への関心</b>		
A1. 障害のある子どもの保育に関心を持っている	4.33	0.72
A2. 障害児保育を支える基本的な理念に関心がある	3.83	0.77
A3. インクルーシブ保育について関心がある	3.98	0.72
A4. 保育現場における障害児保育の課題を理解している	3.24	0.87
A5. 発達が気になる子どもの理解や援助に関心を持っている	4.36	0.74
<b>領域 2：子ども理解と援助</b>		
B1. 様々な障害について理解している	2.96	0.74
B2. 障害のある子ども理解を深める方法を理解している	2.87	0.79
B3. 子どもの障害の特性を理解し、援助ができる	2.78	0.75
B4. 子どもの得意なこと、つよみを見つけ、援助することができる	3.35	0.78
B5. 子どもの発達の課題に合わせた援助をすることができる	3.02	0.80
<b>領域 3：障害児の成長を支えるための保育実践</b>		
C1. 保育課程に基づく指導計画の作成・記録・評価ができる	2.52	0.95
C2. 障害のある子どもの個別の指導計画の作成・記録・評価ができる	2.69	0.84
C3. 障害のある子どもの生活や遊びの環境設定ができる	3.33	0.83
C4. 子ども同士のかかわりあいや育ち合いを援助することができる	2.77	0.83
C5. 保育現場での適切な合理的配慮を行うことができる	3.04	0.91
<b>領域 4：家族や地域との連携・協働</b>		
D1. 保護者とコミュニケーションをとることができる	3.76	0.76
D2. 保護者や家庭の理解に努め、連携をすることができる	3.52	0.78
D3. 障害のある子どもが他に利用する専門機関等と連携することができる	2.94	1.09
D4. 保育現場での子どもの様子を家族や専門機関等に説明することができる	3.33	1.06
D5. 発達が気になる子どもについて家族や地域と連携することができる	3.01	0.87
<b>領域 5：専門性の開発</b>		
E1. 子どもの理解や援助方法について同僚や先輩に相談することができる	4.13	0.79
E2. 保育実践のふりかえり（省察）ができる	3.70	0.74
E3. 子どもの姿から学びながら、保育者として成長することができる	3.56	0.84
E4. 障害のある子どもの家族支援について学び続けることができる	3.34	0.88
E5. 地域連携方法やソーシャルワークについて学ぶ姿勢を持つことができる	2.90	0.93

Note: n = 163

SDは標準偏差を表している。

## 障害児保育実践コンピテンシー尺度における下位尺度の検討

事前に想定した試案のモデルの適合度が十分でなかったことから、CSPCDにおける下位尺度を明らかにするため、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。探索的因子分析の実施する前に、各項目の平均値と標準偏差(Table 1)からフロア効果、天井効果を検討し

た。フロア効果に当てはまる項目はなかったものの、A 1 及びA 5 の項目において平均値+1SDの値が評定値上限の5を上回り、天井効果が生じていると考えられた。しかしながら、藤田・永瀬(印刷中)が指摘しているように、A 1 とA 5 の項目は障害児保育実践を行うためのコンピテンシーの基盤となる障害児保育への関心を表す極めて重要な項目であることから、そのまま探索的因子分析

Table 2 CSPCDにおける探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）の結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	$h^2$
<b>F1: 障害児保育への関心 (<math>\alpha = .767</math>)</b>						
A1. 障害のある子どもの保育に関心を持っている	<b>.820</b>	.185	.003	-.227	-.129	.596
A2. 障害児保育を支える基本的な理念に関心がある	<b>.701</b>	.156	-.108	-.014	-.020	.512
A3. インクルーシブ保育について関心がある	<b>.661</b>	-.098	.014	.047	.047	.445
A5. 発達が気になる子どもの理解や援助に関心を持っている	<b>.528</b>	-.014	.098	.124	.084	.400
<b>F2: 障害児保育に必要なアセスメント (<math>\alpha = .855</math>)</b>						
B3. 子どもの障害の特性を理解し、援助ができる	-.116	<b>.738</b>	-.034	-.109	-.011	.690
B2. 障害のある子ども理解を深める方法を理解している	.098	<b>.706</b>	.185	.108	.069	.695
B1. 様々な障害について理解している	.298	<b>.616</b>	-.093	.068	-.076	.546
A4. 保育現場における障害児保育の課題を理解している	.117	<b>.524</b>	-.192	.124	.084	.374
C1. 保育課程に基づく指導計画の作成・記録・評価ができる	.019	<b>.432</b>	.212	.112	.118	.532
C2. 障害のある子どもの個別の指導計画の作成・記録・評価ができる	-.153	<b>.422</b>	.283	.192	.005	.477
<b>F3: 障害児保育における実際の関わり (<math>\alpha = .847</math>)</b>						
C3. 障害のある子どもの生活や遊びの環境設定ができる	-.039	-.072	<b>.839</b>	.102	-.177	.594
B4. 子どもの得意なこと、つよみを見つけ、援助することができる	-.049	.162	<b>.825</b>	-.217	-.041	.577
B5. 子どもの発達の課題に合わせた援助をすることができる	-.076	.140	<b>.781</b>	-.090	.044	.640
E2. 保育実践のふりかえり（省察）ができる	.118	-.126	<b>.562</b>	.175	.093	.547
E1. 子どもの理解や援助方法について同僚や先輩に相談することができる	.262	-.211	<b>.463</b>	.211	.114	.557
D1. 保護者とコミュニケーションをとることができる	.108	-.004	<b>.368</b>	.142	.017	.287
<b>F4: 障害児保育における保護者・他機関との連携 (<math>\alpha = .867</math>)</b>						
D3. 障害のある子どもが他に利用する専門機関等と連携することができる	-.147	.119	-.109	<b>.849</b>	.016	.650
D5. 発達が気になる子どもについて家族や地域と連携することができる	-.021	.097	.014	<b>.816</b>	-.026	.730
D4. 保育現場での子どもの様子を家族や専門機関等に説明することができる	.040	.028	.143	<b>.769</b>	-.074	.731
<b>F5: 障害児保育における専門性の開発 (<math>\alpha = .872</math>)</b>						
E4. 障害のある子どもの家族支援について学び続けることができる	-.136	.028	.549	-.173	<b>1.008</b>	.920
E5. 地域連携方法やソーシャルワークについて学ぶ姿勢を持つことができる	.136	.283	.522	.091	<b>.848</b>	.623
E3. 子どもの姿から学びながら、保育者として成長することができる	.282	.312	.490	.051	<b>.673</b>	.722
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	
F2	.504	-	-	-	-	
F3	.424	.408	-	-	-	
F4	.602	.522	.447	-	-	
F5	.548	.454	.496	.556	-	

Note:  $n = 163$

$h^2$  は共通性を示している。

を行うこととした。

探索的因子分析を実施した結果、解釈可能性から5因子構造が採用された。因子負荷量が.35未満の項目、ダブルローディング項目を除き分析を繰り返し、最終的に22項目となった。因子1は、「障害のある子どもの保育に関心を持っている」、「障害児保育を支える基本的な理念に関心がある」、「インクルーシブ保育について関心がある」「発達

が気になる子どもの理解や援助に関心を持っている」等の項目に高い因子負荷量を示したため、「【障害児保育への関心】と命名した。因子2は、「保育現場における障害児保育の課題を理解している」、「様々な障害について理解している」、「障害のある子ども理解を深める方法を理解している」、「子どもの障害の特性を理解し、援助ができる」、「保育課程に基づく指導計画の作成・記録・評価

ができる」、「障害のある子どもの個別の指導計画の作成・記録・評価ができる」等の項目に高い因子負荷量を示したため、【障害児保育に必要なアセスメント】と命名した。因子3は、「子どもの得意なこと、つよみを見つけ、援助することができる」「子どもの発達の課題に合わせた援助をすることができる」「障害のある子どもの生活や遊びの環境設定ができる」「保護者とコミュニケーションをとることができる」「子どもの理解や援助方法について同僚や先輩に相談することができる」「保育実践のふりかえり(省察)ができる」等の項目に高い因子負荷量を示したため、【障害児保育における実際の関わり】と命名した。因子4は、「障害のある子どもが他に利用する専門機関等と連携することができる」、「保育現場での子どもの様子を家族や専門機関等に説明することができる」、「発達が気になる子どもについて家族や地域と連携することができる」等の項目に高い因子負荷量を示したため、【障害児保育における保護者・他機関との連携】と命名した。因子5は、「子どもの姿から学びながら、保育者として成長することができる」、「障害児のある子どもの家族支援について学び続けることができる」、「地域連携方法やソーシャルワークについて学ぶ姿勢を持つことができる」等の項目に高い因子負荷量を示したため、【障害児保育における専門性の開発】と命名した。それぞれの因子負荷量及び共通性についてはTable 2に示す。なお、因子5における「障害のある子どもの家族支援について学び続けることができる」については、因子負荷量が1を超えているが、これはプロマックス回転によるものと考えられる。この項目における共通性を示す $h^2$ の値が1を超えていないことから、Heywood Case (不適解)には当たらないと考えられる。探索的因子分析の結果をTable 2に示す。

#### 障害児保育実践コンピテンシー尺度における下位尺度の信頼性の検討

CSPCDにおける信頼性を検討するために、採用した項目におけるCronbachの $\alpha$ 係数を算出

した。その結果、本尺度は高い値を示した( $\alpha = .923$ )。続いて、各下位尺度における信頼性について検討するために、各下位尺度におけるCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、【障害児保育への関心】( $\alpha = .767$ )、【障害児保育に必要なアセスメント】( $\alpha = .855$ )、【障害児保育における実際の関わり】( $\alpha = .847$ )、【障害児保育における保護者・他機関との連携】( $\alpha = .867$ )、【障害児保育における専門性の開発】( $\alpha = .872$ )のいずれにおいても高い値を示された。それぞれの下位尺度における $\alpha$ 係数についてもTable 2に記載した。

#### 障害児保育実践コンピテンシー尺度における内容的妥当性の検討

作成されたCSPCDの22項目に対して、内容的妥当性を障害児保育の経験を豊富に有する保育園園長及び、主任保育士とともに検討した結果、第1因子「障害児保育への関心」、第2因子「障害児保育に必要なアセスメント」、第3因子「障害児保育における実際の関わり」、第4因子「障害児保育における保護者・他機関との連携」、第5因子「障害児保育における専門性の開発」において、いずれも障害児保育実践コンピテンシー領域として不可欠であることが示された。特に、第1因子「障害児保育への関心」、第4因子「障害児保育における保護者・他機関との連携」といった領域が極めて重要であるという指摘を受けた。

#### 障害児保育実践コンピテンシー尺度における因子的妥当性の検討

CSPCDにおける因子的妥当性を検討するために、構造方程式モデリングを用いた確証的因子分析を実施した。探索的因子分析により明らかされた5因子モデルの検討を行った結果、モデルの適合度の値は、 $\chi^2 = 465.479$ ,  $df = 199$ ,  $p < .001$ ,  $CFI = 0.860$ ,  $GFI = 0.793$ ,  $AGFI = 0.737$ ,  $RMSEA = 0.091$ であった。CFI、GFI、AGFI、RMSEAといった各指標の値は試案のものより改善されたものの、まだ十分なものとはいえなかったため、Amos 28.0が示した修正指数をもとに、項目A 2

と項目A 5、D 5、項目A 3と項目B 3、項目A 5と項目B 2、D 4、項目B 3と項目B 4、項目B 1と項目C 2、項目A 4と項目B 5、項目C 1と項目C 2、項目C 3と項目E 5、項目E 2と項目E 1、項目E 1と項目E 3の誤差間に共分散を設定するモデルを作成し、その適合度を確認したところ、概ね当てはまりの良いモデルが確認された( $\chi^2 = 306.117$ ,  $df = 187$ ,  $p < .001$ ,  $CFI = 0.937$ ,  $GFI = 0.860$ ,  $AGFI = 0.811$ ,  $RMSEA = 0.063$ )。

### 障害児保育実践を行うためのコンピテンシーと保育機関での経験との関連

障害児保育実践を行うためのコンピテンシーと保育士としての在職年数との間の関連を明らかにするために、CSPCDにおける合計得点及び、下位尺度得点と保育士としての在職年数との間におけるPearsonの積率相関係数を算出したところ、【障害児保育への関心】得点と保育士としての在職年数の間において有意な相関係数が示された( $r=.196$ ,  $p < .05$ )。また、【障害児保育に必要なアセスメント】得点と保育士としての在職年数の間において有意傾向な相関係数が示された( $r=.135$ ,  $p < .10$ )。しかしながら、合計得点( $r=.127$ ,  $n.s$ )

【障害児保育における実際の関わり】得点( $r=.028$ ,  $n.s$ )、【障害児保育における保護者・他機関との連携】得点( $r=.075$ ,  $n.s$ )、【障害児保育における専門性の開発】得点( $r=.058$ ,  $n.s$ )においては保育士としての在職年数との間に有意な相関係数は見出されなかった。

続いて、障害児支援経験の有無によって、障害児保育実践を行うためのコンピテンシーが異なるのかを検討するために、障害児支援経験の有無を独立変数、PSPCDの合計得点及び、各下位尺度得点を従属変数とした対応のないt検定を実施した。その結果、合計得点( $t(148.932) = -4.666$ ,  $p < .01$ )、【障害児保育への関心】( $t(161) = -3.908$ ,  $p < .01$ )、【障害児保育に必要なアセスメント】( $t(161) = -5.170$ ,  $p < .01$ )、【障害児保育における実際の関わり】( $t(141.134) = -2.658$ ,  $p < .01$ )、【障害児保育における保護者・他機関との連携】( $t(139.225) = -3.536$ ,  $p < .01$ )、【障害児保育における専門性の開発】( $t(161) = -2.388$ ,  $p < .05$ )のいずれにおいても有意な群間差が認められ、障害児支援経験有群の方が障害児支援無し群に比べて得点が高かった。下位尺度における各群の平均値をFigure 1に示す。

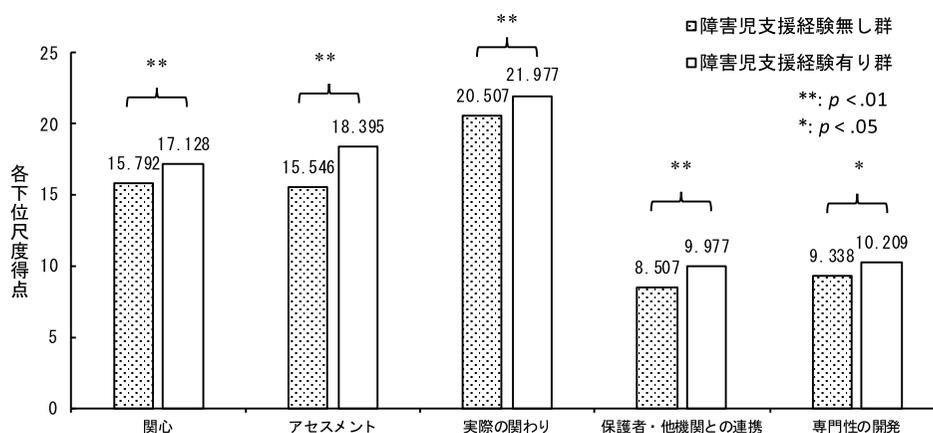


Figure 1 CPCDSにおける各下位尺度得点

#### IV. 考察

本研究の目的は、障害児保育実践を行う上で必要となるコンピテンシーを測定することのできる、障害児保育実践コンピテンシー尺度(CSPCD)を作成することであった。加えて、障害児保育実践コンピテンシーに影響を及ぼすと考えられる保育士としての在職年数及び、障害児支援経験の有無と障害児保育実践コンピテンシー尺度の得点との関連を明らかにすることであった。その結果、CSPCD試案の項目について因子分析を行ったところ、CSPCDは5因子構造からなることが明らかになった。また、CSPCDにおける【障害児保育への関心】得点と保育士としての在職年数が有意に関連することと、CSPCDの合計得点、及び各下位尺度の得点が障害児支援経験の有無によって有意に異なることも明らかにされた。これらの点について以下で考察を行う。

#### 障害児保育実践コンピテンシー尺度(CSPCD)における下位尺度

探索的因子分析の結果、CSPCDは【障害児保育への関心】、【障害児保育に必要なアセスメント】、【障害児保育における実際の関わり】、【障害児保育における保護者・他機関との連携】、【障害児保育における専門性の開発】の5つの因子から構成された。これらの因子をCSPCDの下位尺度とした。【障害児保育への関心】は、障害のある子どもの保育やインクルーシブな保育への関心や、障害のある子どもに対する支援への関心によって構成されるコンピテンシーである。これは、藤田・永瀬(印刷中)で示された障害児保育実践コンピテンシーモデルの基盤となるものである。適切な障害児保育の実践を行う上で必要な知識や技能は、それらを身につけたいという動機づけがなければ身につかないものである。そのため、【障害児保育への関心】が下位尺度として見出されたと考えられる。【障害児保育に必要なアセスメント】は、障害特性の理解や子ども理解、保育に関わる支援計画の立案や評価などによって構成されるコンピテンシーである。障害のある子どもや特

別な支援ニーズのある幼児に対する関わりが適切に行われるためには、その子どもに対する十分なアセスメントが必要である(本郷, 2008)。対象となる子どもがどのようなニーズを持っているのかを把握するのみならず、どのような支援計画が必要なのか、実施した支援は効果的であったのかを検証する際にもアセスメントが行われなければならない(本郷, 2008)。そのため、【障害児保育に必要なアセスメント】が下位尺度として見出されたと考えられる。【障害児保育における実際の関わり】は、障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもが適応的に活動できる環境を設定することや障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもと適切に関わることなどによって構成されるコンピテンシーである。障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもについて適切なアセスメントを行い、支援の計画を立てたとしても、実際の保育現場においての関わりでは、子どもの体調や機嫌、保育施設の人的・物的環境など、その状況に応じて臨機応変に子どもに対する対応を変えていく必要がある。そのため、【障害児保育における実際の関わり】が下位尺度として見出されたと考えられる。【障害児保育における保護者・他機関との連携】は、障害のある子どもの保護者と連携することや医療機関等の他の支援機関と連携することなどによって構成されるコンピテンシーである。障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもについて適切な支援を行うためには、子どもの家庭での様子に関する情報を保護者から入手することが必要である。また、保育施設において行っている支援を家庭でも実施してもらう場合、保護者に保育施設でどのような支援を行っているのかを伝えることも必要である。こうしたことから、障害児保育実践には保護者との連携が求められるといえる。また、文部科学省(2008)は、障害のある子どものための地域における相談支援体制整備ガイドライン(試案)において、障害のある子どもやその保護者が抱える様々なニーズや困りごとに対して適切な相談・支援を行っていくためには、多分野・多職種による総合的な評価

と、多様な支援が一体的かつ継続的に用意されていることが重要であると述べている。こうしたことから保育士においても他職種と連携し、障害のある子どもや保護者をアセスメントし、支援を実施していくことが求められているといえる。【障害児保育における専門性の開発】は、障害のある子どもや特別な支援ニーズがある子どもに対する支援を継続的に学びによって構成されるコンピテンシーである。これは、障害児保育実践に関わるコンピテンシーを高めることに対する動機づけであり、こういった動機づけによって、上述したコンピテンシーの各構成要素が維持、向上していくと考えられる。

### 障害児保育実践コンピテンシー尺度(CSPCD)における信頼性と妥当性

まず、CSPCDの信頼性について、採用した項目におけるCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、本尺度は高い値を示した。このことから、CSPCDは十分な信頼性を有していることが確認された。【障害児保育への関心】、【障害児保育に必要なアセスメント】、【障害児保育における実際の関わり】、【障害児保育における保護者・他機関との連携】、【障害児保育における専門性の開発】のいずれにおいても、Cronbachの $\alpha$ 係数は高い値を示していた。このことから、CSPCDにおける下位尺度も十分な信頼性を有していることが確認された。次に、CSPCDの妥当性について、障害児保育の経験を豊富に有する保育園園長及び、主任保育士からの指摘及び、確証的因子分析の結果から検討した。保育園園長及び、主任保育士によって全ての下位尺度が妥当であることが確認され、確証的因子分析によって示されたモデルの適合度も概ね当てはまりの良いものだったことから、一定程度の妥当性があることが確かめられた。このようにCSPCDは、信頼性と妥当性を備えた障害児保育実践コンピテンシーを測定できる尺度として適用できると考えられる。

### 障害児保育実践コンピテンシーと保育年数及び、障害児支援経験の有無との関連

まず、CSPCDによって測定された障害児保育実践コンピテンシーと保育士としての在職年数との関連を明らかにするために、CSPCDの合計得点及び、下位尺度得点と保育士としての在職年数との間の相関係数を算出したところ、【障害児保育への関心】得点と保育士としての在職年数の間において有意な相関関係が示された。このことは保育士としての在職年数が増えるほど、障害児保育への関心が高まるという可能性を示唆している。保育機関での在職年数を重ねるほど、障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもと関わる機会は増えていくと考えられ、保育士はその都度、そういった子どもとの関わりについて様々なことを考えさせられると推察できる。このような保育現場における障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもとの出会いの積み重ねが、障害児保育への関心を高めていることが考えられる。また、【障害児保育に必要なアセスメント】得点と保育士としての在職年数の間において有意傾向な相関関係が示された。上述したように、保育機関での経験の積み重ねは障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもとの出会いの積み重ねでもあるといえる。このような子どもとの出会いの積み重ねによって、障害のある子どもや特別な支援ニーズのある子どもの特徴に関する枠組みが形成され、それが障害児保育に必要なアセスメントに関するスキルを形成していると考えられる。しかしながら、【障害児保育に必要なアセスメント】得点と保育士としての在職年数の間において示されたのは有意傾向な相関関係であるため、今後新たに対象者を増やした上で、その関連をより詳細に検討していくことが必要である。そして、【障害児保育における実際の関わり】、【障害児保育における保護者・他機関との連携】、【障害児保育における専門性の開発】については、保育士としての在職年数との間に有意な相関が示されなかった。このことは、障害児保育実践コンピテンシーが保育機関での職務を継続するだけで身についていく

ものではなく、障害児保育実践コンピテンシーに特化した研修等の介入によって身についていくものであるということを示唆している。

次に、CSPCDによって測定された障害児保育実践コンピテンシーと障害児支援経験の有無との関連を明らかにするため、対応のないt検定を実施したところ、CSPCDの合計得点と全ての下位尺度得点において有意差が見られ、障害児支援経験のある保育士の方がいない保育士と比べて得点が高かった。この結果は、障害児支援経験のある保育士の方がいない保育士に比べて障害児保育実践コンピテンシーを高く有していることを示唆している。障害児支援はアセスメント、支援計画の立案、支援の実施、支援の評価といった一連のプロセスによって行われる。こうしたプロセスを経験していることが、【障害児保育への関心】、【障害児保育に必要なアセスメント】、【障害児保育における実際の関わり】、【障害児保育における保護者・他機関との連携】、【障害児保育における専門性の開発】といった各領域のコンピテンシーを高めていると考えられる。

### まとめと今後の課題

本研究では、永瀬・藤田(印刷中)が作成したCSPCDの信頼性と妥当性を検討した。その結果、CSPCDは一定程度の信頼性と妥当性を備えた尺度であることが確かめられた。また、障害児保育実践コンピテンシーと、保育士としての在職年数や障害児支援経験の有無との関連について検討したところ、障害児支援経験がある保育士の障害児保育実践コンピテンシーが、障害児支援経験のない保育士のそれと比べて高いことが明らかにされた。これによって障害児保育実践コンピテンシーの内実が明らかにされたと考えられる。

今後の課題としては、今回開発したCSPCDを活用した研究の蓄積が求められる。例えば、障害児保育実践コンピテンシーを向上させるための研修の効果検証の際にCSPCDを活用することなどが考えられる。研修の前後でCSPCDを保育士に聴取し、どのような研修が効果的なのかについて

検討することが今後必要となるだろう。

### 付記

本研究にご協力いただきました保育士の方々に深く感謝いたします。また、統計解析の手法についてご助言いただきました山口県立大学社会福祉学部の角田憲治先生に感謝いたします。

### 引用文献

- Everts, H.F. (1987). The competency programme of the American Management Association. *Industrial and Commercial Training*, 19, 3-7.
- 藤田久美. (2019). 幼児期の障害児通所支援に携わる支援者の専門性向上のためのコンピテンシーモデルの検討. *山口県立大学学術情報*, 12, 25-37.
- 藤田久美・永瀬 開. (印刷中). 障害児保育実践の質向上を目指したコンピテンシーモデルの提案と尺度の作成. *教育文化研究*, 13
- 本郷一夫. (2008). 子ども理解と支援のための発達アセスメント. 東京: 有斐閣選書
- 文部科学省. (2008). 第二章 相談・支援のための体制づくり. 障害のある子どものための地域における相談支援体制整備ガイドライン(試案) <[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/021/003.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/021/003.htm)> (2022年12月15日10時37分)
- 中村誠司・水上勝義. (2016). 保育士・介護士コンピテンシー尺度の提唱. *未来の保育と教育東京未来大学保育・教職センター紀要*, 53-60.
- 西木貴美子・小川圭子. (2015). 保育者が考える「障害児保育の専門性」に関する研究: KJ法を用いたスモールグループディスカッションによる検討. *四天王寺大学紀要*, 59, 609-622.
- 園山繁樹・由岐中佳代子. (2000). 保育所における障害児保育の実施状況と支援体制の検討: 療育のある統合保育に向けての課題. *社会福祉学*, 41, 61-70.
- 山本佳代子. (2020). 保育士の子どもと保護者支援コンピテンシーに関する一考察. *西南学院大学人間科学論集*. 15, 2, 243-254.

## Reliability and Validity of the Competency Scale in Practice of Childhood Care for Children with Disabilities Scale

NAGASE Kai  
FUJITA Kumi

The aim of this study is to examine the reliability and validity of the Competency Scale in Practice of Childhood Care for children with Disabilities (CSPCD). Moreover, this study examines the relationship between CSPCD and careers of nursery teachers. The results exhibited that CSPCD consisted of five sub-scales interest in childcare for children with disabilities necessary assessments in childcare for children with disabilities; the actual involvement in childcare for children with disabilities; collaboration with parents and other organizations in childcare for children with disabilities, and development of expertise in childcare. Our study finds that there is sufficient reliability and validity in this regard due to significant correlation between the score of interest in childcare for children with disabilities in CSPCD and the required number of years of experience for a childcare institution. Additionally, it was clarified that the total score of CSPCD and the scores of each sub-scale differed significantly depending on the teachers' individual experiences in assisting children with disabilities.

Childhood care for children with disabilities, Nursery teachers, Competency, Reliability and Validity, Careers